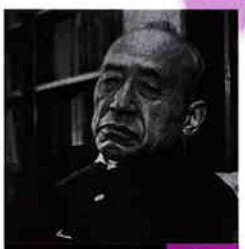
哲学者、評論家、社会学者、文学者、教育学者、
経済学者、ジャーナリストなどの
「知性」をめぐるさまざまな言説を人物ごとに集成！

日本人の知性

第Ⅱ期●全10巻

「知性」という概念やその機能の時代的変化を超えて、
人間や社会のあり方の本質に迫った
高く深い知性を提供！



11 天野貞祐 Amano Teiyu

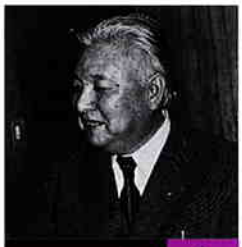
12 南博 Minami Hiroshi

13 高橋義孝 Takahashi Yoshitaka

14 中村光夫 Nakamura Mitsuo

15 奥野信太郎 Okuno Shintaro

16 賀川豊彦 Kagawa Toyohiko



17 式場隆三郎 Shikiba Ryuzaburo

18 大内兵衛 Ouchi Hyoe

19 辰野隆 Tatsuno Yutaka

20 古谷綱武 Furuya Tsunatake

発行 学術出版会　発売 日本図書センター

著者の専門的な論考のエッセンスが凝縮された内容

＋

日常的視点により書かれた人生論、自伝的随筆、短評など、著者の新しい一面を垣間見ることができる内容

これら2種類がバランスよく編まれた1冊

内容見本「20 古谷綱武」（70％縮小）

人間は平等なり

この題で私は民主主義の根柢、その哲学的基礎について述べてみたいと思います。哲学者が言いました。世界のうちに全く等しいものはない、あればそれは同一物だと。平たく言えば、世の中に同じものはない。皆相互に違っている。木の葉でも玉子でも互に似てはいても全く等しくはない。かように或る個体を他の個体と対立させ区別せしめ、個体をしてその個体として成り立たしめる性質を個性と言いますならば人間は極度に個性的であります。人心の異なる、その面の如しといわれますように、元来体力も知力も道徳力までもその程度と様相とにおいて異なり個性の極端に発達しているのが人間であります。このあくまでも個性的な人間がしかも平等だとはそもそもどういうことなのでありましょうか。もしすべての人間をあらゆる関係において一様にしてしまおうとするならば、それは人間をアミーバの如く扱い、人間を人間でなくしてしまうことであります。それは個性的とは相容れません、個性をふくむことができません。人間をふくむことができません。人間は平等なり、という場合の平等はそういう平板空虚ないわゆる悪平等でないことは申すまでもありません。人間が平等なのは人間たることにおいてであります。人間をして真に人間たらしむる条件に関してであります。随っていうところの平等は内に差別をふくみ個性を成り立たしむる平等でなければなりません。それでは人間が人間たることとはどんなことか。人間とは如何なる存在者でありましょうか。

人間は生物であります、しかも動物であります。けれども一般の動物とちがって理性的動物だといわれます。人間は感覚や記憶や意識だけでなく精神をもった存在者だといわれます。理性とか精神とかいわれる力は何よりも先ずすべてのものを対象化する働きとして現われます。すなわち精神はすべてのものを前においてながめる働き、随ってすべてのものから自分を離し、自分を自由にする働き、その意味ですべてのものを超える働きをなします。超越ということが人間の最も重要な性格であります。この働きがありますから私達は自分の立場を越えて他人の立場に立つことができます。思いやりという徳はここに成り立つのであります。弟子の子貢が「一言にしてもって終身これを行うべきもの有るか」と問うたのに対して孔子が「それ恕か」といわれたその恕はこの超越性から生れるのであります。かくの如く人間は凡てのものから自分を離すことができるから自分というものをもっています。これに反し動物は物の

内容見本「11 天野貞祐」（70％縮小）

◉大正から昭和への移行期、太平洋戦争前後という激動の時代に書かれた各言説から、当時の日本の知的状況、西洋的思想に対する反応、政治的イデオロギーなど、新しく現れた社会の諸相を捉えることができる

◉現代のグローバリゼーション、ナショナリズム、ジェンダー、階層格差などの問題にも通ずる先駆的な視点は、再読により今日的意味を発見させてくれるとともに、新しい視点や感性を与えてくれる

生きるということ

1

生きていくということは、未来にむかってあるいていくことである。未来とは、未知の世界である。その未知の方へ、手さぐりでふみだしていくことが、生きることだといってもいい。死とは、無行為に帰することであるならば、生きるということは、いつもなにかをすることである。しかも、それは未知の世界へのあゆみである。心はたえず、未知の期待にもおののいているが、また、未知の不安にもおののいているのである。それだから、人々の未知の、未来を知りたいという熱情は、今なお、原始の根づよさを失っていない。占師の言葉をききたがる人間は、今もあとをたたないのである。いかなる未来が自分を待っているかという不安が、人々を今なお、占師の方へ魅きつけていくのである。未知のおそろしさは、苦しいからである。さまざまの占いの長い歴史は、それがそのまま、未来を知りたいという人間の根づよい願望のあらわれである。

しかし、私は、人間にとって、未来は常に未来でしかあり得ないし、また、未知は未知でしかあり得ないものだと思っている。ただそれは、永遠の未来ではなく、また、永遠の未知でもないというわけだ。未来は、やがて現在になり、未知はやがて既知となるであろう。しかし、未来が、未来という場所にあるあいだは、それはどこまでも未来として理解しているよりしかたがないし、また、未知が、未知の世界にあるあいだは、それはどこまでも未知として納得しているよりほかにしかたがないと思っている。つまり私は、未来と未知とは、わからないものであり、きめられないものだと思っている。しかしそこに、自分の将来の運命が待っていることを思うと、それがわからないことであり、きめられないことであるということは、考えようによっては、非常にたのしみなことであるかもしれないが、また、かぎりなく不安なことなのでもある。なぜなら、そこは、幸運の場所となろうが、また、一転すれば、不運の場所ともなるからだ。

2

全くおなじ人生をあるいてきた人間というものは、この世には一人もいない。百人の人がいれば百のことなった人生を、千人の人がいれば千のことなった人生をあるいてい

11 天野貞祐

生をこの世に享けて世界と人生とを学ぶということは、それだけで既に十分な意味を生存に対して与えるでありましょう。国民として市民として、親子兄弟姉妹として、友人として人間を生きてみることは決してつまらぬことではなく、その体験だけですでに生れて来た意味があるともいえるでありましょう。

「人生論　創造的人生論」より

目次

道理の感覚
道理について
徳育について
自由について　ほか
教育論
教育試論
教育刷新の問題
知育の徳育性
教育と社会　ほか
友情論
友情・同情・愛　ほか
読書論
読書論
読書と思考について
読書の思い出
人生論
人生の道
私の人生観
創造的人生論
学問と人生　ほか
若き人たちへ
学生諸君に与う
婦人学徒に与う
学習と原則
学生と音楽　ほか
忘れえぬ人々
わたしの少年時代
わが母のことなど
ハイデルベルク学派の人々
内村鑑三先生のこと
年譜

天野貞祐（あまのていゆう）
哲学者・教育者。一八八四～一九八〇年。神奈川県生まれ。京都帝国大学文学部哲学科卒業。同大教授などを経て、一九五〇年第三次吉田改造内閣文相、道徳教育を強調した「国民実践要領」を提案して批判を浴びる。一九六一年文化功労者。一九六四年より獨協大学初代学長。専攻のカント哲学以外にも、人生論、教育論、学生論に関する論述も少なくない。著作に『道徳の感覚』『学生に与ふる書』、訳書に『純粋理性批判』など。

12 南博

「近代」への疑惑
自然主義について
文学伝統について
外国文学の鑑賞
近代日本文学の一性格―笑いの喪失―
自分で考える
青年と自殺―哲学的自殺について―
利口すぎる民族
教科書
精神の速力
文学の俗化
人間典型の創造
同人雑誌
怠惰の芸術
知性と青春
青春について
幸福について
知性と倫理
生活と思想
結婚の理想と現実
友情について
心に触れる言葉
自分の回復
読書について

中村光夫（なかむらみつお）
文芸評論家、小説家、劇作家。一九一一～一九八八年。東京都生まれ。本名、木庭一郎。東京帝国大学文学部仏文学科卒業。西欧と日本の近代化の対比を通じて日本近代文学を鋭く批判、戦後は私小説批判を主軸に丹羽文雄や広津和郎との論争など旺盛な活動を展開した。一九六七年日本芸術院賞受賞。一九八二年文化功労者。著作に『風俗小説論』『志賀直哉論』『二葉亭四迷伝』など。

15 奥野信太郎

われわれがよくよく考えなければならないことは、文化的恩恵をうけるだけがけっして文化そのものではないということだ。……なるほど自動車は文化文明の所産かもしれないが、それに乗ったからといってその人間が乗らない人間より文化的に進歩したとはいえない。

「世代のかけ橋　山のあなたの空遠く」より

目次

人工楽園の薔薇
人工楽園の薔薇
中国文学とは
丁玲
舌の伝統
比較文学以前
考える庭
考える庭
煎餅蒲団と茶漬
曝書
曝書と売書

現代日本の精神病院の特性
精神病院と緑化
癖の心理
寿命の問題
もはや問題児はいない
病院ストにメスを入れる
二笑亭綺譚
琉球点描
小指物語
壷を割る男
永井博士と長崎の鐘
長寿者の足と耳
年譜

式場隆三郎（しきばりゅうざぶろう）
精神医学者、美術評論家。一八九八～一九六五年。新潟県生まれ。新潟医学専門学校卒業。大宮脳病院、国府台病院などを経て、式場病院を開設。戦後、ロマンス社社長として娯楽雑誌を発行した。山下清の後援者としての活動、精神病理学の視点から研究した独創的なヴァン・ゴッホ論など、美術分野でも高名。著作に『文学的診療簿』『二笑亭綺譚』『ファン・ホッホの生涯と精神病』など。

18 大内兵衛

学問とは、社会の理、物象の理、経済の理、道徳の理をつきつめることである。新しいことばでいえば、真理の探究である。もう一度、この句を解釈しよう。いかにしてわれわれは、われわれの心を正しくすることができるか。

「Ⅱ　大学の意義（入学生に与う）」より

目次

Ⅰ
永久平和の条件（第三勢力論）
日米関係の将来（ライシャワー博士の見解）
賠償問題は厳粛
Ⅱ
日本における学問の黎明（『蘭学事始』物語）
学問と思想の自由のために（福沢諭吉によせて）
日本の独立と私学の任務
Ⅲ
万古を照らす真理の炬火　ほか
私の信条
兵衛の上京
イエスとノー
Ⅳ
歌われない国民歌
何のために経済学を学んだか（東大における終講のことば）
如何にして生活を改善すべきか
ジェームス・ワットとアダム・スミス
ジョン・スチュアート・ミル
Ⅴ
学生時代の読書についての回想
唯物史観の黎明を踏める足跡（櫛田民蔵氏の『唯物史観』を読む）　ほか
Ⅵ
京洛の春
平和の群像
スイス紀行
[illegible]

12 南博

個人が、一旦、集団の中へ自分を投げ入れ、すべての人の投げ入れた結果が、こんどは、各人のものとして戻ってくる。あるいは個人が集団をくぐって、集団化された個人として、ふたたび自分を高いレヴェルで発見するのである。

「社会と人間　資本主義的人間・社会主義的人間」より

目次

現代の社会心理
社会心理学の背景
大衆社会と小集団
政治家の心理と論理
反抗と虚無のデカダンス
十代の心理と行動
日本の芸術
日本芸術の精神的背景
日本人の芸術
芸道意識
マス・コミュニケーションをめぐって
「世論」の政治的効用
日本の大衆文学　ほか
アメリカとアメリカ人
戦時の滞米生活から
アメリカの大衆と読書　ほか
平和と真実
平和論をめぐって
真実だけが人間を裁く
北京から帰って
文化交流はこうありたい
社会と人間
資本主義的人間・社会主義的人間
チャンバラの流行
新しい男女関係
日本人の劣等感
スキャンダルの心理　ほか
若き日の読書
年譜

南　博（みなみひろし）
社会心理学者。一九一四～二〇〇一年。東京都生まれ。京都帝国大学文学部卒業。一九四〇年渡米、コーネル大学大学院にて社会心理学を学ぶ。帰国後、一橋大学助教授を経て、一九五八年同大教授。マス・コミュニケーション理論の紹介ときわめて幅広い研究対象で、日本における社会心理学のパイオニア的役割を果たす。著作に『社会心理学』『日本人の心理』『自己発見』など。

13 高橋義孝

人間の世の中は不便ということもなければ成り立ちがたいものなのです。不便ということにも大きな意味があるのです。面白くいえば、人生とは不便ということではないか。便利一点張りなら、人間この世に生れてこない方がよほど何かと便利ではないか。

「日本人と日本語」より

煎餅蒲団と茶漬
曝書
購書と売書
与謝野先生の漢詩　ほか
夢を買う男
夢を買う男
左官屋、火事、インテリ
退屈読本　ほか
世代のかけ橋
世代のかけ橋
英雄製造
通訳雀
連歌盗人　ほか
命を惜しむ
命を惜しむ
怖いという思い　ほか
夢は虹のように
夢は虹のように
落葉のころ
個人の名前　ほか
寂光
驪山への旅
天下第一泉
水のある風景　ほか

奥野信太郎（おくのしんたろう）
中国文学者、随筆家。一八九九～一九六八年。東京都生まれ。慶應義塾大学文学部卒業。北京留学を経て、一九四八年同大教授。中国文学を講ずる傍ら、数多くの軽妙な随筆で人気を博す。座談の名手としてラジオ・テレビに活躍した異色の文人教授でもあった。著作に『日時計のある風景』『文学みちしるべ』『はるかな女たち』など。

16 賀川豊彦

人間にとっては、生きること、強く生きることが、第一の仕事である。相対の世界に置かれている以上、他人の考えがすべてわかろう道理もなし、全能者でない以上、世界の組立てがすべてわかろう筈もない。しかし強く生きることによって、過去を振り返って見ると、だんだん賢くなっているとも考えられる。

「表現の世界　疑問と信仰との境界線」より

目次

一粒の麦
どうして神を発見するか
本然への信仰
宗教についての対話
実在の実在・価値の価値
「我」の神
神と運命　ほか
表現の世界
生命と物質
スフィンクスとの対話
表現の世界
疑問と信仰との境界線
永遠の否定から永遠の肯定へ
認識論についての瞑想
物質に対する新しい考え方

平和の群像
スイス紀行
帽子について
厨川先生の片影
櫛田民蔵の生涯と業績
求道の戦士河上肇
Ⅶ
年譜

大内兵衛（おおうちひょうえ）
経済学者。一八八八～一九八〇年。兵庫県生まれ。東京帝国大学経済学部卒業。大蔵省勤務、ドイツ留学を経て、一九二三年東京帝国大学教授。財政学を講じ、門下から多くの学者を輩出、日本のマルクス経済学の一大山脈をかたちづくる。一九五〇年より法政大学総長。向坂逸郎と共に社会主義協会・社会党左派の理論的指導者でもあった。著作に『財政学大綱』『経済学五十年』、訳書に『女性の解放』など。

19 辰野隆

社会に貧富の差の存するのは已むを得ぬとはいえ好い事ではない。貧富の懸隔の甚だしいのは明らかに社会悪である。この社会悪は徐々に改めなければならない。それを改めるには――革命？　否。……革命の哲理が革命の行動によって誤られなかった例は未だ嘗てない。

「Ⅰ　日本人」より

目次

Ⅰ
昨日までの日本
日本人
身にあまる事ども
書斎から見た政界　ほか
Ⅱ
仏蘭西文学とは
モリエエルの喜劇について
『シラノ』閑言話
フイガロの結婚
ユウゴオ五十年
スタンダアル寸観
バルザック考　ほか
Ⅲ
愛書癖
書狼書豚
書物のゆくえ
書斎
我等の露伴
一冊の本
Ⅳ
水泳
野球
ゴルフ　ほか
Ⅴ
日銀を立てた雷おやじ
わが母の記
辰野四兄弟のこと
忘れ得ね風丰
若い友だち（東大時代の教え子たち）

辰野隆（たつのゆたか）
フランス文学者、随筆家。一八八八～一九六四年。東京都生まれ。東京帝国大学法科大学仏文科卒業。フランス留学を経て、日本人ではじめて母校のフランス文学講座を担当、のち中央大学教授。古代から近代までの詩・小説・戯曲研究を通じて、日本の文学にも新風をもたらす機縁をつくった。一九四八年日本芸術院会員。一九六二年文化功労者。著作に『ボオドレエル研究序説』『忘れ得ぬ人々』、訳書に『フィガロの結婚』など。

点張りなら、人間この世に生れてこない方がよほど何かと便利ではないか。

「日本人と日本語」より

目次

思想の抜け穴
人生観の構造と意味
近代の考察
まぬけの効用
国歌斉唱
明日の日本と教育のあり方
政治に対する知識人のためらい
落ちていた将棋の駒について
青年論の盲点
女らしさ
日本人と日本語
末世の読書子
危機に立つ今日の芸術
マルクス主義文学理論批判
芸術作品の分析
「さしみのつま」的批評
文学が芸術でないとすれば
文学の善と悪
情痴文学論
危機に立つ今日の芸術
わが文芸学の生い立ち
鷗外文学の魅力の秘密
トーマス・マンと日本人
カフカと夢
年譜

高橋義孝（たかはしよしたか）

ドイツ文学者、評論家。一九一三～一九九五年。東京都生まれ。東京帝国大学独文科卒業。ドイツ留学を経て、九州大学、桐朋学園大学などの教授を歴任。ゲーテやトーマス・マン研究のほか、辛辣かつ洗練された随筆も世評を呼んだ。能楽・相撲に興味を持ち、一九六五年からは横綱審議委員会委員長を務めた。著作に『森鷗外』『近代芸術観の成立』『大人のしつけ紳士のやせがまん』など。

14 中村光夫

自分の幸福について思いわずらう暇があったら僕らはもっと直接に人生に対して自分は何をなすべきかを考えてみる方がよいのである。すべて行為は人生の現実の内容であり、また僕らは幸福の観念を見失ったとき初めて本当に幸福になれるからである。

「知性と青春　幸福について」より

目次

文学のありかた
芸術は人間に必要か
小説は芸術か
思想と文体
表現の自由
『鍵』を論ず
『金閣寺』について
近代への疑惑
疑問と信仰との境界線
永遠の否定から永遠の肯定へ
認識論についての瞑想
物質に対する新しい考え方　ほか
黙想断片
朝
禅の単純生活
黙想断片
静思断片
禅と遊戯　ほか
愛の科学
愛の創成
愛と運命
愛と科学
愛と芸術　ほか
自然が芸術となるまで
民衆芸術について
田園文学について
「死線を越えて」を書いた動機　ほか
年譜

賀川豊彦（かがわとよひこ）

キリスト教社会運動家、伝道者。一八八八～一九六〇年。兵庫県生まれ。不遇な家庭環境と病身の苦難の中でキリスト教信仰に入り、一九一一年神戸神学校卒業。プリンストン大学留学を経て、帰国後友愛会に参加。労働組合運動、農民運動、平和運動に先駆者的な役割を果たす。戦後、貴族院議員となり、日本社会党結成、世界連邦運動に参加した。著作に『死線を越えて』『一粒の麦』など。

17 式場隆三郎

芸術だけでなく、もっと広い人間生活においても、最も高いものは協団的生活である。最も進化した人間生活は、個性を露出しない協同生活である。来るべき時代もまた、天才偉人だけを人間の理想としない調和ある健康なものであらねばならぬ。

「Ⅱ　民芸と性能」より

目次

Ⅰ
ヴァン・ゴッホと耳切りの悲劇
異端の画家ロートレック
地獄の門にたつロダン
悲しみの裸婦を描くモジリアニ
陶芸家バーナード・リーチを描く
棟方志功の性格
山下清の人と作品　ほか
Ⅱ
木喰上人の民芸仏
旅と民芸
安部栄四郎と出雲民芸紙
河井武一の人と作品
中国の民芸陶器　ほか
音楽と神経病
精神異常者の文章
狂人の絵
Ⅲ

究を通じて、日本の文学にも新風をもたらす機縁をつくった。一九四八年日本芸術院会員。一九六二年文化功労者。著作に『ボオドレエル研究序説』『忘れ得ぬ人々』、訳書に『フィガロの結婚』など。

20 古谷綱武

人類の歴史の長い過去と遠い未来のなかを生きてきた、また未来に生きていくであろう、それこそ天文学的数字をもってかぞえなければならないほどの無数の人類のなかに、……私というこの私自身は、永遠に一人しかいない。私は永遠にかけがえのない私なのである。

「生きるということ　私について」より

目次

自分を生きる
とびらのことば
気の小さい私について
働いて食べていく自信がなかった
弟や妹に劣等感をいだく
新しい友だちからのしげき　ほか
生きるということ
私について
生きるということ
運と不運について
人間らしい生き方
恋愛と結婚
日本のすがた
環境の現実
親と結婚
嫁の身の上
妻の寝すがた
結婚の目的　ほか
どう暮したらよいか
くらしのあじわい
くらしとすまい
夫を主人と呼ぶ家
生活のなかの夫婦
くらしと労働　ほか
作家論
火野葦平
武者小路実篤
石川達三
吉屋信子
堀辰雄　ほか
年譜

古谷綱武（ふるやつなたけ）

評論家。一九〇八～一九八四年。ベルギー生まれ。成城高校中退。早くから谷川徹三に師事する。大岡昇平、中原中也、河上徹太郎らと同人誌「白痴群」を創刊、文芸評論家として筆をふるう。その後は、新感覚派以後の作家のモラルを論じる評論家の道を歩んだ。戦後は女性論、人生論、児童文学論の分野を開拓し盛名を馳せる。著作に『女性のために』『児童文学の手帖』『才能と誠実』など。

日本人の知性

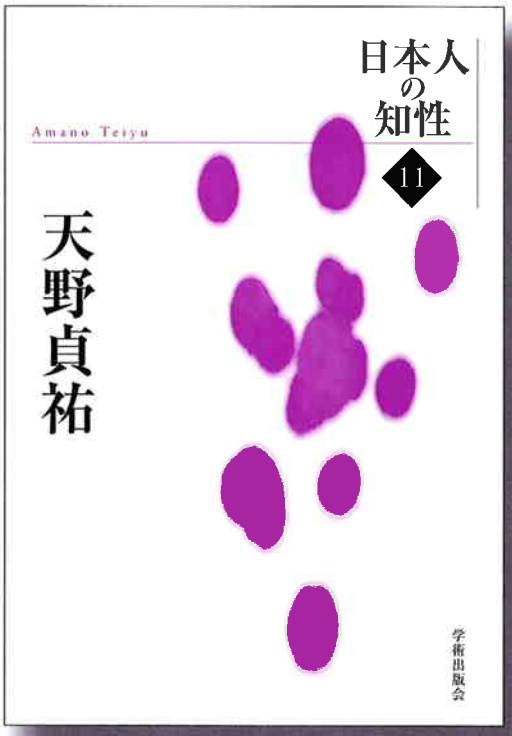
底本「現代知性全集」(日本書房・1958～1961年)

A5判・上製・カバー装・各巻平均280頁

セット定価：50,400円(本体 48,000円＋税)
各巻定価　：　5,040円(本体 4,800円＋税)

第Ⅱ期全10巻

11 天野貞祐
12 南　博
13 高橋義孝
14 中村光夫
15 奥野信太郎
16 賀川豊彦
17 式場隆三郎
18 大内兵衛
19 辰野　隆
20 古谷綱武



■発行■ 学術出版会　〒112-0012 東京都文京区大塚3-8-2　TEL 03-3947-9153　FAX 03-3947-9157
http://www.gaku-jutsu.co.jp

■発売■ 日本図書センター　〒112-0012 東京都文京区大塚3-8-2　TEL 03-3947-9387　FAX 03-3947-1774
http://www.nihontosho.co.jp

注文書

日本図書センター

〒112-0012 東京都文京区大塚3-8-2
TEL 03-3947-9387　FAX 03-3947-1774
http://www.nihontosho.co.jp

書店印

				注文数
「日本人の知性」第Ⅰ期全10巻		ISBN978-4-284-10241-4 セット本体 48,000円＋税		セット
2010年5月完結 好評既刊	1 亀井勝一郎	ISBN978-4-284-10228-5	本体 4,800円＋税	冊
	2 谷川徹三	ISBN978-4-284-10229-2	本体 4,800円＋税	冊
	3 小林秀雄	ISBN978-4-284-10230-8	本体 4,800円＋税	冊
	4 鈴木大拙	ISBN978-4-284-10231-5	本体 4,800円＋税	冊
	5 和辻哲郎	ISBN978-4-284-10232-2	本体 4,800円＋税	冊
	6 中野好夫	ISBN978-4-284-10236-0	本体 4,800円＋税	冊
	7 長谷川如是閑	ISBN978-4-284-10237-7	本体 4,800円＋税	冊
	8 清水幾太郎	ISBN978-4-284-10238-4	本体 4,800円＋税	冊
	9 小泉信三	ISBN978-4-284-10239-1	本体 4,800円＋税	冊
	10 大宅壮一	ISBN978-4-284-10240-7	本体 4,800円＋税	冊
「日本人の知性」第Ⅱ期全10巻		ISBN978-4-284-10274-2 セット本体 48,000円＋税		セット
2010年10月刊行	11 天野貞祐	ISBN978-4-284-10263-6	本体 4,800円＋税	冊
	12 南　博	ISBN978-4-284-10264-3	本体 4,800円＋税	冊
	13 高橋義孝	ISBN978-4-284-10265-0	本体 4,800円＋税	冊
	14 中村光夫	ISBN978-4-284-10266-7	本体 4,800円＋税	冊
	15 奥野信太郎	ISBN978-4-284-10267-4	本体 4,800円＋税	冊
2010年12月刊行	16 賀川豊彦	ISBN978-4-284-10269-8	本体 4,800円＋税	冊
	17 式場隆三郎	ISBN978-4-284-10270-4	本体 4,800円＋税	冊
	18 大内兵衛	ISBN978-4-284-10271-1	本体 4,800円＋税	冊
	19 辰野　隆	ISBN978-4-284-10272-8	本体 4,800円＋税	冊
	20 古谷綱武	ISBN978-4-284-10273-5	本体 4,800円＋税	冊

◉お名前　◉ご住所　◉お電話